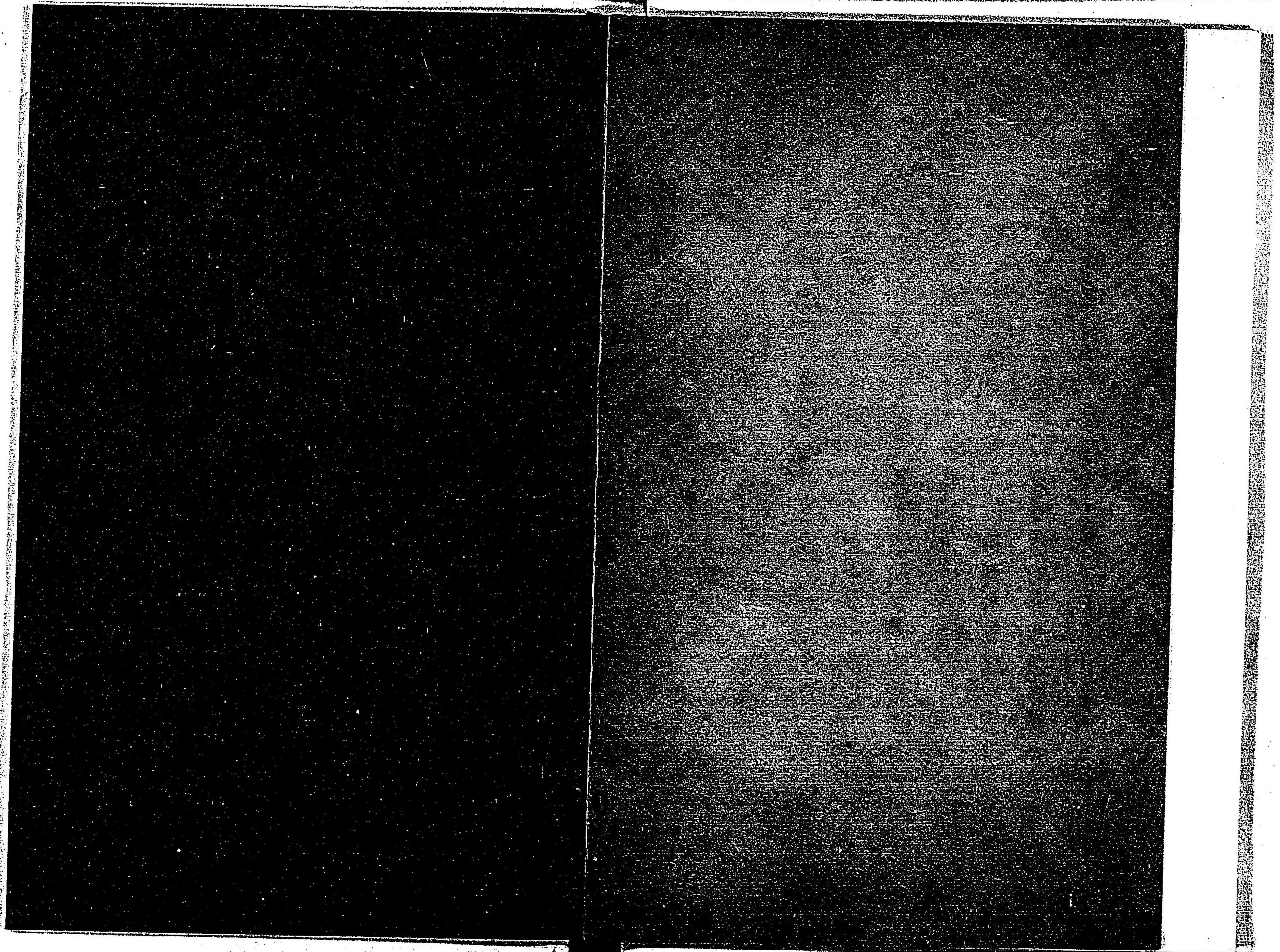


詩
奴
日





緒言

予は弱齡より宗乘を研尋するに解義心に安ん
どあるときは必ず師友に就てこれを審定す而して今や



久し學友も共に談ずべきものなり然るに
問題は要中の極要にして眞俗二諦の宗意
骨目なれを捨て顧みざして可あらんや依
著してこれが批評を海内の諸賢に請ふ
小冊を著してこれが批評を海内の諸賢に請ふ
ふものなり僅に一二の論者ありて予を起せり因て重
てこれが説明をなす是を第二編とす頃日井上博士教育宗

教衝突の論を發して耶蘇教を判して非國家主義よきて
國家主義に非ざると云へり吾佛法も若真俗二諦の宗義を
能く躰得して自行化他するに非ざれば恐くは非國家主
義にして耶蘇教と異なることありと評せられん仰で諸
の有志者に告す共ニ精神を凝し念力を盡して一宗の繁
昌を期し玉はんことと切望するものなり

明治二十六年九月

東陽圓月敬白

二諦妙旨談後編

東陽閣圓月述

一日同社某氏或人の予が二諦妙旨談を評したるを袖に
來て示さる予この冊子以著述してよこ以來の批評
を待つや大早の雲霓を望むが如く然るに予
が評論する所の有人の義を賛成するものはこれを黙止
す非を而してこれを言はざるものは牙齒を勞す
るに足らざるとするか又うの賛成せざるに非るも傍觀し
て批評を加へざるか眞宗の關節なれば徹細に研究せざ
るべからざる要義なるを捨て顧みざるをの何ぞ宗教よ

淡泊なるや風るに聞く有名の教授に於て宗乘を討論するに稱名破滿の文に至て教員ハ如此の論處は安心に關するが故に深入りをすべからむとて通過せり予ハ安心に關する所はうの深奥を論究せんことを欲するものなり又聞く各縣とも信徒の安心まちくになれりと是他なく教職たる僧侶乃宗義を研尋むるの深からざるに職をこれ由る宗教の振はざる不亦宜乎今この批評を得たるは實に喜躍に堪へざるなり然而るの批評する所をみるに未だ予か辨むる旨趣を得ずしてこれが辨駁をなすに似たり依てこれ以て説明して某氏に返却す

一念滅罪以て眞宗の正意と認定して安心の初起後續の心相を論ずるこれ予が宗意を何ふの要點なり故に先滅罪の義を論ぜん罪と云は惡果を招くを以て罪と名く惡果を招かざるものは罪と非ざるに或人は滅罪の義を論ずるにこれを一念にも滅し平生にも滅し臨終にも滅すみな實義なり疑無明煩惱を滅するに一念あり憍惡成善は平生にして諸煩惱全滅は臨終にあるべし一念に偏し臨終に偏するいづれも過失あるべし云云辨じて云く一念滅罪と云は疑惑無明を滅するなりと云は寶章に過去未來現在の三世の業障一時に罪きにて

どの玉ひ無始曠劫よりこのあたつくりをきたる悪業煩惱をば一時に消滅し玉ふ故にわれらが煩惱悪業はことごとくくみなきつてどの玉ふは疑惑佛智を滅することゝするか豈其然乎又縱令一念に滅する所は疑無明なりと許すも疑惑は罪を滅するを以て信益とするの義となるなり然るに信疑は反對にして暗去明來只是遮表の異なるは疑無明を除くは即是明信佛智おればこれ能得の因にして所得の益にあらざ寶章に一念滅罪と云ものはこれ信所得の益なり疑惑を以て信一念に滅する所の罪とするものうの理通暢せぎ文に對して旨を領せよ生死輪

轉の家よ還來するどの玉ふ如きは疑を以て六道四生の因とするには非ず彼文は二種深信は釋意を述べ玉ふも此にして煩惱悪業ありてあさましく吾機の方を顧みて本願を疑ふところを捨てしむるの釋意ありこの義は和語燈の深信釋に就て伺ふべきなり 一の二十六丁二の三十一 丁三の二十六丁七の十四 丁等披て見るべし

又化土に生ぜるの因は修諸功德及植諸徳本を回向するを以てうの因とするのみ疑惑は眞實報土に入ることを能はざるの罪なり故に深自悔責するべきを報土に入ることを得るなり當知疑惑の罪は信心によりて滅するに非

不疑つぎなきのはれたるがすなはち信心しんじんなり信心しんじんをうるが即疑すなはちつぎなき
 はれたるなり次に轉惡てんあく成善じやうぜんは平生へいせいにして諸煩惱しよぼんごうはこれ
 を臨終りんじゆうに滅めつすや云ふもの地獄ぢごくだねは臨終りんじゆうまで滅めつせざ
 て命いのち乃盡つぎるときはこれを全滅ぜんめつすと云ふ義ぎなるべし然しかれ
 は信しん一念いっぺんに一切いっさいの煩惱ぼんごうを頓とんに滅めつすると云ふ義ぎに非あらざ
 て漸滅ぜんめつとするの義ぎなりこれ聖教せいぎょう量りやうに違ちがするの説せつなり信
 卷くわんに横超わうてう斷だん四流しりゆうを釋しやくし玉たまひて言い斷者だんじや發起はつし往相わうさう一心いっしん故無こむ
 生而當受しやうじゆうたうじゆ生無しやうむ趣而更應しゆじゆじゆ到趣たうしゆ已六趣いりくしゆ四生ししやう因亡いんわう果滅くわめつ故頓
 斷だん絕ぜつ三有生さんじゆしやう死故曰斷也しこゝろにだんといふと四流しりゆうを釋しやくして四暴流しはうりゆうといふ即六趣すくわん四
 死しを斷だんす故ゆゑ又横またわう超斷てうだんと云いなり 眞要鈔しんぎやうしやう云い今云いまいとてころの往生わうじやうといふはあなが
 眞要鈔しんぎやうしやう云い今云いまいとてころの往生わうじやうといふはあなが

ちに命終めいじゆうのときに非あらざ無始むし已來いらい輪轉りんてん六道りくだうの妄業わうごふ一念いっぺん南
 無阿彌陀佛なむあみだぶつと歸命きふめいする佛智ぶつち無生むじやうの名願なむらん力りきにほるばされ
 て涅槃ねはん畢竟へいぎやうの眞因しんいんはしめてきざすところをさすありす
 なはちこれを即得すく往生わうじやう住不退轉じゆたいてんてんとときあらはさるゝな
 りと御一代ごいちだい聞書もんしよに信心しんじんと云いは彌陀あみだが一念いっぺんに御ごたすけ候まう
 へとたのむときやがて御ごたすけあるすがたを南無阿彌なむあみだ
 陀佛たぶつと申まうなり總そうじてつみひかほどあるとを一念いっぺん乃信なむ
 力りきにてけううゝなひ玉たまふなりと乃玉なむひて上かみの眞要鈔しんぎやうしやうを
 引ひき玉たまふ此等こしらの諸文しよぶんに依よつてこれをみるに漸滅ぜんめつの義ぎに非あら
 ざるまるまてま必かならずま

或人云安心領解の相は死ぬれば地獄に行くものを死ぬれば淨土に参らせ下さるゝと信ぜる外なり後續も同く死ぬれば地獄に行くものを死ぬれば往生と思ふの外なし此則初後不二乃至後續に地獄行の機と云べからむといふ説を立て初後無別に相續せられざる譬切れ安心を主張するは何ぞや

反質して云初後共に死ぬれば地獄に行くものを死ぬれば参らせ下さるゝと思ふと云は念々如此思ふて臨終まで少しも差別なくとするの義なるべし然らば地獄行き地獄に行かざるやうに成り竟るは臨終の時に在りと

云はざるべからず地獄行きの地獄に行かざるやうにありたるを正定聚の位とするが故に正定聚の益を初起より臨終に至るまで得る所の益にして一念の時より得已るものよは非ずとするか若一念の益とせを一念の時に最早地獄行きに非せしてこれを即得往生と説き玉ふなり上に眞要鈔を引くが如し○今謂初起と後續との差別を安堵心と歡喜心の異にして地獄ゆきを御助けとおもふ心相は同なり初起は地獄にゆくべきものを往生せしめ玉ふと安心決着するなり後續は地獄よゆくべきものを往生せしめ玉ふことこのうれしや喜ぶなりうのお

もひふりにかはりはなけれども後續の思ひはるの當位
 地獄ゆきよ非せ初起に領解する所を憶念相續して地獄
 ゆきを往生せしめ玉ふとこれと思ひ浮べて喜ぶのみ是
 以譬切に非るなり相續に就いていふ又一念のとき地獄行きが地
 獄に行かぬやうにありたるが正定聚にして臨終まで地
 獄行きに非るる故に初後の別なく地獄ゆきに非るか正
 定聚に住したるすがたなりこれ所得の益に就てこれを
 いふ初起よ正定聚に入て臨終まで正定聚に住するか故
 に初起も往生一定をおもひ後續に至りても往生一定と
 おもふこれを相續心といふ何を惡口を吐て譬切れ安心

と云ふや地獄行きの機が相續するに非せ地獄ゆきの機
 一念の時正定聚の機とあるかり一人の上に地獄行き
 の機と正定聚の機と二機あるべからせ委く妙旨談に述
 るが如く若或人の云が如くならば聞己即滅の機はたの
 む一念の時一切の諸煩惱を滅盡せしめて往生すると
 云ふ然ぞして至極短命の機は一念に一切の諸煩惱を滅
 盡すと云はゞ聞己即滅の機は頓斷にして長命の機は漸
 斷とするか何ぞ思はざるの甚しきや所得の益に就いていふ又一たび安
 堵したる決定心は臨終に至るまで思ふ思はぬにあらは
 らす寐たときもあさましき心の起るときも常住不斷な

りこれ信心の身に就ていふ而して時々意業に發動して
 地獄ゆきを御助けのうれしやと思ひ浮ぶるこれを憶念
 相續の歡喜心とする豈譬切れ安心あらんや已上三重相
 續心に就て云も所得の益も就て云も信心の身に就て云
 もいづれの邊より云ふも往生一定の心初後不二なり或
 人は地獄行きの機が相續すると云が故に一人上に地獄
 行きの機と正定聚の機と二機ありといふ義となる然れ
 ば佛心凡心一躰になるとは云ふべからず地獄ゆきの機
 は凡心にして正定聚の機は佛心なれば佛心凡心別躰な
 りと云はざるを得ず又復或人の解する如くなれを聞名

の一念より臨終の一念までをつかねて信心決定の相と
 するの義にして初後共に安堵決定にて歡喜の位ハなき
 ことになるべし然れば或人は予を難じて譬切れ安心な
 りと嘲りしが已れが安心は屍も首頭も分らぬ生海鼠安
 心なりや云ふべし寶章に信心さだまりぬれば淨土の往
 生は疑なくおもふて喜ぶことなりとの玉ふ或人の説は
 これに抵觸するの説なり達教の臆説と云べし妙旨談に
 これを委く辨じられたるも或人は視れども見はざるの風情
 なり請再思せよ又或人の予が後續に於て地獄ゆきの機
 に非ざると云ふを肯んぜざる其意何如或人の機と云は本

分の機實を指して云らん本分の機は無有出離の機よ
 して即地獄ゆきの機なりこの機は信の一念よ正定聚の
 機となるべし安心決定鈔云念佛三昧について信心決定
 せん人は身も南無阿彌陀佛ころも南無阿彌陀佛あり
 とおそふべきなりひとの身をバ地水火風の四大よりあ
 ひて成ぜ身を極微にくだきてみるも報佛の功德のろ
 まぬところはあるべからざれば機法一躰の身も南無
 阿彌陀佛なりころは煩惱隨煩惱等具足せり刹那々々
 に生滅すころを刹那にちはりてみるも彌陀の願行の
 遍せぬところなければ機法一躰にしてころも南無阿

彌陀佛なり又云たとへば火のすみにおこりつきたるが
 如くはなたんとするともはなるべからず攝取の心光わ
 れらとてらして身より髓にとほる心は三毒煩惱の心ま
 でも佛の功德のろみつかぬところはなす機法もどより
 一躰あるところを南無阿彌陀佛と云なりと此等の文意
 を得てこれみれば信後に無有出離の機あるべからず
 煩惱隨煩惱等の相は地獄行きの相に同じけれども地獄
 種子となるべきものに非ざたとへば穀種を蒔たる残り
 を炒りて燒米とするに炒りたる穀と田に蒔たる穀はう
 の相たは同じけれども炒りたる穀は芽を生ぜざるが如

何ぞ地獄ゆきといふことを得んや請ふ聖教を熟讀して宗意の所在を誤ること勿れ又地獄にゆくものは御助けと信ぜる信心が心々相續して初後不二なるが故に後續に於て地獄ゆきの機なきときは初後不二に非せざるか若然らば雜行雜修をすて、彌陀をたはむを初起の安心とするが故に念々相續して後續に至ても雜行雜修をすつるか然らざれば初後不二に非るべし請ふ自省せよ一日親友の來訪あり火鉢を中よして對坐し法話立門に入る友人云或人師の説を評して法徳の一邊に偏執せりと世教も不偏不倚これを中といふ佛教にも空假に偏

せざる然中と云ふ是以中祖大師は罪けいてたすけ玉はんども罪けさせして助け玉はんども我としてはからふべからむ罪の沙汰無益なりとの玉ふ然れハ罪けいてに執するも罪けさせしてに泥むるの一邊に偏するときは過失汝招くべし請ふこれ汝改めよ

答云予固より宗義を窺ふに戦々兢々と志てうの誤あらんことを恐れて聖教を解するにこれを容易にすることなくつらく聖教の所判を搜索するにつみの沙汰無益なりとの玉ふは中祖大師法慶に對して仰せられしより外一向にこれなし然り而して法慶に示し玉ふものは安

心領解の場所に於てハ罪の沙汰無益あり佛の御ハから
 ひにまかせて我としてハからふべからず信心の沙汰を
 以くたびもくすべとの玉ふこれ安心上の御教示な
 り安心領解の邊にては實に罪の沙汰はいらぬことなり
 たゞ佛のたすけ玉ふ願力にまかせつれば罪けして助け
 玉はんとも罪けさぎして助給玉はんとも我として計ら
 ふべからせ然るに諸聖教の上に罪の沙汰を玉ふもの
 擧て數ふべからず或は念々之中罪滅心淨との玉ふ
 は專精繫心常能念佛一切諸障自然消除との玉ひ
 讚よこの意を述て一形惡をつくれとも專精に心をかけ

安樂和
 註論或

いめて常に念佛せしむれば諸障自然にのぞりぬとの
 玉ふ此等の諸文は觀經下々品の意を述玉ふ或は横超斷
 四流を釋して六趣四生因亡果滅との玉ひ或は無始已來
 輪轉六道の妄業一念南無阿彌陀佛と歸命する佛智無生
 の名願力にほろぼされと玉ふ中祖これを引玉ひて鑿
 して罪はいかほどあるとも一念の信力よてけりうな
 ひ玉ふなりとの玉ふ又和讚を引てこれを釋し玉ひ過去
 未來現在の三世の業障一時に消滅すの玉ふ此等の諸
 文は本願成就乃文意を述玉ふものなり其他一念滅罪の
 文あり多念滅罪の文あり一々これを擧るに違なき安心

上に於ては無益の論あり、雖解義上に在てはこれを辨
 解せざるときは宗義曖昧にして了義と云べからず或人
 の予を評せしは安心上と解義上とを混淆してこれ論
 ざるものなりと謂ふべし滅罪の時節を論決せざれば宗
 意明了ならざれば一念滅罪を以て實際とするときは多念
 の時滅すべき罪はあるべからず多念滅罪を以て實際を
 するときは一念の時三世の業障を滅するの説は虚妄と
 成るなり若一念よも滅し多念にも滅すと云はし一念の
 時はいかなる罪を滅していかなる罪を殘してこれを滅
 せざるや既に三世の業障一時に消滅すとの玉ふときは

多念に至て滅すべき罪あるべからず然るに罪けしては
 偏するも失あり罪けさざしては泥むも失あり不偏不倚
 これを中と云と云はし滅するにもあらず滅せざるにも
 非せとするか曖昧不明了の宗義誰かこれを許さんや御
 一代聞書の如きハ二邊は偏すべからずと誠しめ玉ふに
 非せ罪の滅不滅を安心上にてはこれを論ざるはいらぬ
 ことなりとの玉ふのみ時勢漸く文明に向ふて理學化學
 既に盛行はるゝの世にして有形の理を究むることは
 殆ど深奥に至れり電信機あり電氣燈あり傳話器あり實
 に凡人の所作は非ざるに似たり有形の理を己に將し究

め盡さんとて而して今や哲學又行はれて無形の理究
 めんとするの世あり宗教上若うの理通暢せざるどころ
 あるときは教法を以て死物視せられんとす方今の僧侶
 ちやらんばらんよて轉迷開悟の活法門を取扱ふ豈慨歎
 せざるべけんや上に引く所の諸文の中高祖中祖兩大師
 の教語の如きは中祖大師は和讃を稱して聖人御す、め
 の和讃との玉ひ法慶房の御文を以て直々の師教と心得
 られたり然れば和讃御文等は我輩愚凡の爲の所信の教
 法なり解義上の教語かりと雖安心に關せずして看過す
 べけんや廣略二門佛性有無等の如き題目は安心に疎き

論題なりや雖安心に關せずと云べけんや廣畧相入すな
 はち往生即成佛にして初生速極の義なれを信後に往生
 治定と歡び彌陀同躰のさとりを得しめ玉ふと喜ぶが如
 き自ら往生即成佛の義に契ふなり佛性有無の如きも無
 有出離と信ざるがすなはち佛性なきの義なり然れば安
 心に疎きものと雖亦自ら安心に關するところあり況や
 滅罪の如きは他力信心の妙益なれを大に關するところ
 あるべし然るにうの滅罪の實義曖昧にして一念とも多
 念とも定めがたきものなりとせば定聚に入りたるか入
 らざるか分明ならせしめて我往生も治定したるか治定せ

ざるか判然ならせと云はざるべからず寶章の金言を見よ三世の業障一時消滅して正定聚の位又等正覺の位にさだまるとの玉ふもの一念滅罪即是正定聚に入るなり豈一念滅罪の時往生治定するの義にあらざや眞要鈔に成就の即得往生を釋し玉ひて無始已來輪轉六道の妄業一念南無阿彌陀佛と皈命する佛智無生の名願力にほろぼされて涅槃畢竟の眞因はしめてさざすところを即得往生不退轉と説顯はざるなりとの玉ふ然れは一念滅罪に非ざれば佛因圓滿に非ず佛因圓滿に非ざれば入正定聚は非ぞ入正定聚即是往生治定の義なれば一念滅

罪の時往生治定する義明瞭なると青天に白日を見るが如くこれを改めて暖々霧裏に入れと何ぞ人を誣るの甚しきや

問云一念滅罪を以て眞宗の正意として而もこの解義安心に關するとならば安心上亦一念滅罪を以て談すべきの理なり然るに罪けしてと罪けさすしてとに偏すべからすと云はし豈解義と安心と齟齬するよ非ぞや答所信の法義談し又安心決定の時尅を詳にするときは一念滅罪これに關係あるべしと雖法慶に對して罪の沙汰無益なりと仰せられしはるの邊に就て教誡し玉ふに非ぞ

安心領解の信相と述る場所にては只御助け一定と信ず
 るのみ願力にまかせつる上は罪の沙汰はいらぬことな
 りとの玉ふものなり然り而して法慶に答へ玉ふは解義
 上に一念滅罪の宗意に居はりて臨終まで罪もあるべし
 と云御詞を會釋し玉ふものなり今繁きを厭はせ文を擧
 てこれを指示せん御一代聞書云順誓申上られ候乃至仰
 られ候とこの文は一念のところ罪みな消滅す云御
 文と命のあるあひだ罪はつきざるなりと云御詞との相
 違を會釋し玉ふあり初に一念のところ罪みあきにて
 とあるは御の御文の辭次票す次に一念の信力已下は御

文の義意を述べ示し玉ふに別の御詞と會合して示し玉
 ふ後に聖教には一念のところ罪みなきにてとあるな
 りとは汎く聖教を指して一念滅罪の義を結示し玉ふな
 り一念の信力にて往生さだまるとは眞要鈔に成就の即
 得往生住不退轉を釋して無始已來輪轉六道の妄業一念
 南無阿彌陀佛と皈命とる佛智無生の名願力にほろぼさ
 れて涅槃畢竟の眞因はしめてさざす所をさすなりとの
 玉ふこの文を引て加賀の願生等に教示し玉ふこと御一
 代聞書にみたり然れば聞信一念に一切の罪業消滅す
 るが故に往生さだまるとの玉ふ意あり故に知る今一念

の信力にて往玉とだまるとの玉ふが即一念滅罪の義意なり罪はさはりともあらざればなき分なりとは罪は命のあるあひだ罪もあるべくと云ふ別の御詞を會釋法玉ふて一念のとき罪さへ己りて六趣四生の迷の根を絶ち已に往生とだまるとが故に機相に貪瞋等の罪相はありても往生のさはりともあらぬありさればなき分になるなとさはりともならざなき分なりと云ふが即一念のとき罪障消滅し己るが故あり命の娑婆にあらんかぎりには罪はつきざるなり願誓ははやさととりて罪はなきかやとは問の中の罪は命のあるあひだ罪もあるなりに應じて機

相に於て信後と貪瞋等の起るを云ふ煩惱猶起ると雖さはりとならざるゆへなき分の煩惱なり蓋惡趣の因となる煩惱ならばなき分は云べからざれば消滅せざれば生死を離るゝことを得ず生死を離れざれば往生を得べからざれば然れば往生のさはりとなるあり若強て消滅せざして往生すとならば彼土に入り己りても矢張煩惱ありとすべしや若往生するべき必ずこれを消滅すと云ふ罪ありながら淨土に入るべからざるが故に臨終にこれを滅するに非ざるや然れば平生のときたとひ信心はこれにさへられざるも往生には障となると云はざるを得

當知此中消滅するとは果を招くはたらきを断るを
 云ふ罪はつきざるなりとは機相に就て断ぜざるを云ふ
 すなはち断而不断の義なり然るに罪を命のあるあひだ
 つきざるなりとある故に信後にも惡趣の因猶あるに似
 たれども唯ろの相のみありて用なく瓶中の梅菓實を結
 ばせど雖依然として花さくが如く有漏の穢躰滅せざる
 が故に依然として貪瞋等の諸煩惱起ると雖うはたら
 きあるものよ非き臨終に至る時きは穢躰亡失するが故
 に起るべき所由なきが故に起らざるのみ願力を以て消
 滅するが故に起らざるには非ざるなり安心決定鈔に信

心決定の人へ身も心も南無阿彌陀佛なり心は煩惱隨煩
 惱具足せりころを刹那にちはりてみるとも南無阿彌
 陀佛の遍ぜぬところなるとの玉ふたとへはこの火鉢の
 炭火の如く炭の長きは長きなり短きは短きなり火と
 あれり信後の貪瞋煩惱亦かくのむと豈惡趣の種子と
 なるはたらきあらんや安心決定抄然れば信後に煩惱の猶
 起るものは有漏の穢躰亡失せざるよ由るものなり知
 るべく委く初編に述るが如く

問信心獲得章に無始已來つくりとつくる惡業煩惱をの
 ごととこるもなく願力不思議を以て消滅するいはれあり

るが故に煩惱を斷ぜざして涅槃をうといへるはこのことろかりどの玉ふこれ實に消滅するに非ざれども消滅するいれありと云こゝるなるべし然れば消滅するいはれのみにして消滅せざるを實義とするよ非ぞや答卒爾に文をみれをさあるべきに似たれども再三文意を玩味するときは不然若所問の如くならば願力不思議を以て消滅するを實義よ非ぞとして只いはれあるのみと解し去るあり然るときは罪の消るゝ實には願力に非ぞして誰が力にて消るを實義とするや又若平生の時を云へば願力を以て消滅するいはれにして實に消滅するよ非

きて臨終捨命の時清淨功德の國徳によりて罪を滅するを實義とすと云はよ一念滅罪の宗義よ違するの説なり又清淨功德の國徳ハ罪を滅するの徳を云ふには非ぞ煩惱垢業を起らざらむるの徳なるのみろの業用を滅するは佛智全領の一念に在り信後に貪瞋煩惱の起るは果縛の穢躰あるによりて起るなり彼清淨土に入るときは果縛の穢躰をすてよ無漏清淨の身となるが故に煩惱は起らざるものなり今解して云この章は信心獲得の相ふは南無阿彌陀佛のすがたを心得るなりと示し玉ふ南無と皈命する一念の處とハ上に票する六字の中南無の

二字に應ぜり即たのむ機はたらきのあたなり發願回向はつげんかいこうのこゝろあるべし已下は阿彌陀佛あみだぶつの四字に應じてたすけ玉たまふ法はふのかたの義意ぎいを述玉のたまふ發願回向はつげんかいこうのこゝろあるべし等らうとは發願回向はつげんかいこう即是其行そのこゝろとを合あはして大功德だいこくどくを施ほし玉たまふが即攝取不捨すはせりふしやの義なり別處に委く辨するが如し應ま知發願回向はつげんかいこうのこゝろありとは六字の名號なごうにうの義意ぎいあるを云ふなりされば無始已來等むしがいらいらうとは大功德だいこくどくを回向かいこうし玉たまふ同時に一切いっけいの惡業あくごふ煩惱ぼんごうのこゝろ所ところなく消滅しょうめつするなり次の一念いっぴん大利章だいりしやうどうの意い全同ぜんどうし彼章かしやうにこの大功德だいこくどくを一念いっぴんに彌陀みだをたのみ申まうす我等衆生われらうじやうに回向かいこうししますとは今章こんしやうの發願回向はつげんかいこうのこゝろ

るあるべしなり過去未來現在こくごふらいざんの三世さんぜは業障ごふしやう一時いっじにつみきつてとは今章こんしやうのされは無始已來むしがいらいつくりとつくる惡業あくごふ煩惱ぼんごうをのこゝろとこゝろなく願力がんりき不思議ふしぎをもて消滅しょうめつするこれなり正定聚しやうぢやうしゆの位くらゐ又等正覺らうしやうかくの位くらゐなどなどにさだまるものなりとは今章こんしやうの正定聚不退しやうぢやうふたいの位くらゐに住すすとなりと二文にぶん全同第十二無上ぜんどうじふにじふにじやう甚深しんじんの章しやう亦同またどうし對映たいえいして見るべし然しかるに今いまはいはれありとの玉たまひ彼かにはつみきつてとの玉たまふこれを異かとするのみ今いまいれありとの玉たまふは法はふの方は正ましく斷滅だんめつなれとも機はたらきの方に於おては煩惱ぼんごうを斷たぜざるなり機はたらきと法はふを相望あひまみてこれを示しし玉たまふ故ゆゑにいはれありと

の玉ふ若法の方に煩惱を斷ぜざるやきは機の方より消滅するいはれありとは云べからむ當知南無阿彌陀佛は六字のこゝろはたのむもの南無と皈命を善根も功德もいら發願回向のこゝろあるべしこれすなはち彌陀如來の凡夫に回向しましますこゝろありこれを大經には令諸衆生功德成就と、けり惡ありながらされば無始已來つくりとつくる惡業煩惱をのこると故に正定聚不退のこゝろもよく願力不思議をもて消滅するいはれあるが位に住すとなりこのまゝにてたすけ玉ふとなり是以不斷煩惱得涅槃の文を引て衆生の方より煩惱を斷ぜどこのまゝなりにて涅槃をうと結證し玉ふなり此文亦佛の斷德によるが故に衆生の方より不斷なり不斷而斷斷而不斷これを當流一途の所談とするなり亦解す帖外の御文に

對朕するに彼第四帖第三十に南無と皈命する衆生を阿彌陀佛の發願回向とやすくたすけすくひ玉へるこゝろなりこのいはれあるが故にいかなる十惡五逆の罪人五障三從の女人も一念の信心を以てて皈命したてまつれば攝取の光明の中にてら志をきまゝまゐなりと同第五帖第十云一念に彌陀をたのみ奉るものには殊勝の大利無上の功德を我等にあたまゝすいはれあるが故に無始よりこのかたの罪障ことごとくきにはて、正定聚不退の位にかなひ候ものなりと此等皆六字を釋し玉ふ文にしていはれとは所由の義わけいはれと云こゝろ

りこれに准してこれと思ふ願力を以て悪業煩惱を消滅するわけあるが故に正定不退に住すと云ふところなり若然らざらば無上功徳を回向するは只回向するいはれのみにして實に回向するに非ざと解するか豈其然乎

問云古徳の説よ悪業煩惱具足の人の但五逆謗法等能く一念喜愛の心を發すときは現に等覺を成一次の一生に必涅槃に至る然るに豎に進むときは斷惑の等覺なり横に超るときは不斷の等覺なり大信心を獲るときは穢質報心六塵の境に對して種々の煩惱を起すと雖この煩惱は但

誤植

93→39

せむ獲信の後財を損憎すれどもを疑ふものある

に非ぞ依之事惑の信心を障へざるなり一たび信心の眞因を決定するときには彼惑業淨土の正因に抗して三界に牽引すること能はむ喩へば直實なる人ふと金倉の金を偷みて盜の名を得死罪に決するときにはその後善行美事ありと雖已決の罪を反覆すること能はざるが如くと云この義の意は信後に惡趣の因ありと許してたとひ三界の生を引くところの業因あるも淨土の正因は抗抵する

りこれに准してこれと思ふは願力を以て悪業煩惱を消滅するわけあるが故に正定不退に住すと云ふところなり若然らざらば無上功徳を回向するや只回向するいはれのみにして實に回向するに非ざと解するか豈其然乎

問云古徳の説は悪業煩惱具足の人の但五逆謗法等能く一念喜愛の心を發すときは現に等覺を成一次の一生に必涅槃に至る然るに豎に進むときは斷惑の等覺なり横に超るときは不斷の等覺なり大信心を獲るときは穢質報心六塵の境に對して種々の煩惱を起すと雖この煩惱は但

三界の生を牽引して往生の信心を妨礙せき獲信の後財寶を貪り男女の色を愛し或は違逆の境を瞋憎すれどもこの煩惱に因て淨土の有無彌陀の救不を疑ふものあるに非ざ依之事故ハ信心を障へざるなり一たび信心の眞因を決定するときには彼惑業淨土の正因に抗して三界に牽引すること能はざる喻へば直實なる人ふと金倉の金を偷みて盜の名を得死罪に決するときにはうの後善行美事ありと雖已決の罪を反覆すること能はざるが如くと云この義の意は信後に惡趣の因ありと許してたとひ三界の生を引くところの業因あるも淨土の正因は抗抵する

こと能はずるの力ら信力に及ばずして惡因ありながら
 臨終に往生すとかりこの義可なるに似たり云何答云金
 を盗みたるもの死罪は決したる後善行美事あるも已決
 の罪を挽回すること能はざるが如くと云はゞ身三口四
 等を造るは逆誘を除く外穢質報心性得の自躰にして固より惡
 機の當然なれば往生治定の後と雖これを許すところか
 然らば偷盜も邪姪も凡夫當然の業にして已決の往生を
 反覆すること能はざる義意なるべし高祖大師の明
 判に依るときは末燈鈔四十同一丁云信後に於てわざ
 とすまじきことといふまじきことをいひ思ふまじき

ことと思ふことにはあるべからせ心に思はせしめて不圖惡
 業の起ることにはこれあるべきもわざとすることにはある
 べからせとの玉ふ偷盜邪姪の如きはずまじきことにて
 て故思業なり信後にこれを許し玉ふところにて非を高祖
 大師の愛欲名利との玉ふが如きは愛妻愛子はこれある
 も邪姪を許し玉ふは非を金銀財寶を貪る心はこれあ
 るも偷盜を許し玉ふには非を豈これを混淆して論ぜる
 ことを得んや今案ぜるに愛妻愛子は愛欲なり高位顯官
 に誇るは名なり農工商等の業を營むは利なり往生淨土
 の身となりし喜びべきの至ありと雖此等の煩惱にく

るはされて喜ぶべきを喜ばせ慚愧すべしとの玉ふのみ
 上に擧る所の古徳の説は信後にすべきこと、すまじき
 ことの別を辨せせ又故思業と不故思業との異を分たせ
 該してこれを煩惱と云て信後にこれを許すもの鹿齒の
 論よして祖意を得たりとは云べからせ又信後の悪業煩
 惱を以て三界の生を引くところの因と云ふもの六趣四
 生の因亡し果滅すとの玉ふところの祖判に乖くの説な
 り陳善院師五部を評するよこの説よ於てを可否を論ぜ
 せ而して勸説蹄泔記の説を評取して云勸説上二十云蓋
 不斷は機に約するなり煩惱成就の凡夫未だ思量一念の

功を藉らざるが故に佛に約するときは斷なり永劫に勤
 修して欲覺害覺等を生ぜせ蓋是物の爲よ此斷行を行じ
 て行者に回施す行者既よ能くこの斷徳を領するときは
 又何をか斷せん故に不斷と云ふ此行者の斷ハ即佛の斷
 より成するが故にこれすあはち不斷而斷なりこの斷全
 く佛の斷あるときは斷而不斷なり佛に約して語るも亦
 この義あり此不二の理致乃是機法一躰格外の法門學徒
 これを思へばこれによくきこへるなり今この不斷煩
 惱は機の方なり機乃方にては死ぬるまでは事惑も理惑
 も五住地四流も三垢も何も角も手つかせこれありの凡

夫なりこの凡夫が無明煩惱の理事の惑等一切次斷盡し
 已るは如來永劫の斷徳を得る故なり然れば機より云へ
 は不斷にして斷の義になる佛よりみれば斷にして不斷
 なり未燈鈔丁八の無明煩惱を具して安養淨土に往生すれ
 ばすかばち無土佛果に成ると釋迦如來とき玉へりの
 文も經の永拔生死等の文も凡夫の方にて説なり佛智に
 約せば豈無明のみならんや一切の諸惑煩惱一時に斷せ
 この斷徳を知らぬ所を不斷煩惱と云ふ予はこの機法で
 釋する勸説が合點がなるなりさて蹄涔二丁四十に問貪瞋
 煩惱頻りに起る然るに無明を破すると云ふの何の證あ

りや答法躰より云へば三惑除き盡す機邊より云へば三
 惑未斷なり一念の淨信佛の心光と一味なる空きは心能
 く正覺花中に入り已れば煩惱を以て煩惱とせ此に至
 て何を斷未斷と論ぜん機情よりこれを見れば宛然とし
 て舊顔色なり情想已に盡て法躰顯現するを淨土の證と
 す此に於て預め論ずること勿れといふ信心決定して法
 躰の斷徳はあれども機よりみれば舊顔色なり何もかは
 りたことばなひ然るに鷄卵に時を作らせんはいらぬこ
 となり今不斷等の一句は勸淨にて解すべし一念喜愛の
 心發ぬれば煩惱を斷せし生れつきの空のまゝにて臨終

の一念に大涅槃を得るなり已上五部評林然れば笛阜日溪昨夢の三師はうの意これ同じ今案あるに此説大に佳なり笛阜師は説を評して予はこの機法で釋する勸説が合點がなるなりと云ふ此言暗に上の古説は合點がならぬと云ふところなりとおもはるゝなり又日溪師の舊顔色の説を評して鶏卵の時をつくらせんはいらぬことなりと云この意は法躰の斷德にて惡趣に墮するの罪用は滅したれども貪欲等の機相もなくなると云にえ非を斷德を得れをとて貪欲も起らぬ慎悪も起らぬ生きあがら佛の如くなるべしとおもふは甚非なりと述成するなり今更に

勸説のこゝを詳にせば淨土門のこゝろは苟も明信佛智疑惑を除き盡すときは佛智圓斷の德を得るが故に一切諸惑盡く斷盡すと雖これ密益よりしてろは顯證は彼土に至り得る所なりこの故に現生に在ては諸惑を斷ぜんと雖信躰既に佛智なるときは現惑業種を薰むること能はぬ猶瓶中に挿みたる花の故種の力に依て且く花開くと雖菓實を結ばざるが如し云然れば笛阜師のこゝろは疑惑佛智を除き盡すと同時に佛因圓滿して界内界外の諸惑一毫も残らず願力不思議を以て惡趣の業因を斷盡すと雖猶果縛の穢躰有漏の報心ありて煩惱の業作依

然として止まらずして未だ佛果に至らばこの一生をす
 つるとき往生即成佛の妙果を得る時の初て諸惑自然
 よ起らざるなりこれ穢身報心盡るが故なり果縛の穢身
 有漏の報心へ彼花瓶よ挿みたる梅の枝の如く欲界に在
 るはろの瓶水に在るが如く貪瞋煩惱を起すは花の開く
 が如く惡趣の因とならざるは菓實を結ばざるが如く枝
 を折りたる同時に菓實を結ぶ用きを斷つと雖依然と
 て花の開くは水中に生けられたる故なり水中といへど
 も蒼なき枝は花開らばかき蒼ありやいへども水中にあら
 ざれば亦花開らばかき熟思して旨を領せよ

問云前來數番の説明にて一念滅罪の宗意なれを信後に
 地獄種子なく入正定聚の人なれば地獄行きの機に非と
 云ことろの旨を了解せり然るときは法徳の一邊に偏す
 るに非みや答云其然り豈其然らんや子若予が所論を以
 て法徳の一邊に偏せりと云は、高祖中祖二大師も亦偏
 せりやするかり今ろの明文を擧て示さん御一代聞書末
 五丁云佛法の家に奉公申候は、昨日までは他宗よて候
 とも今日は早佛法の御用とこ、ろはべく候たとひあき
 なひをするとも佛法の御用と心得べきと仰られ候と佛
 法とハ中祖の佛法との玉ふは言通意別にして眞宗の法

を指す眞宗の法とは第十八願即南無阿彌陀佛なり佛法
 の家とはいかなる家ぞと云れ淨土眞宗の流を汲む家な
 り奉公とは主人に仕ふるを奉公人と云佛法の家は
 主人と云は他なく阿彌陀如來なり他宗の人たりとも
 眞宗の家に嫁娶なり養子となりし上はるの日より佛法
 即南無阿彌陀佛の御用と心得べしとひ商をするとも
 農工等をするとも南無阿彌陀佛の御用と心得べしとな
 り此詞の獲信の人に局るは非ざるべしすべて眞宗の家
 に在るものは阿彌陀如來をうの主としてこれに仕ふる
 身なれば南無阿彌陀佛の御用にて渡世の營みをするこ

となりと心得べしとなり又佛法を主として世間を客人
 せよとの玉ひ二丁末の十又當流には總躰世間機わろし佛法の
 上より何事も相はたらくべきことなるよし仰られ候と
 本の七此等の文は信未信よかはらむ苟も眞宗の門徒た
 るものは佛法を主とすべしとの玉ふなり況や獲信は人
 に於ては一期の間はこの光明の内につきむ身なりと思ふ
 べしとの玉ひ又彌陀をたのめる人は南無阿彌陀佛に身
 を丸めたることなりと存すべきの由に候との玉ふ高祖
 大師の超世の悲願き、より我等は生死の凡夫かは有
 漏の穢身はかはらねど心は淨土にすみあうぶとの玉ふ

信心を得たるもの凡數の攝にあらざるとの玉ふ然るに機
 柝を談じ玉ふときは愛欲の廣海に沈没し名利の大山に
 迷惑すとの玉ひ命のあるあひだ罪もあるべしとの玉ふ
 雖然地獄者とは玉ふもの聖教の中一文片言もこれか
 然れば二大師も亦法徳に偏せりと云ふか其然り而して
 うの法徳是密益なりと雖些も見つべき無きものに非ぞ
 故に信ある人は見るさへ尊とよとの玉ひ信心治定の人
 は誰によらざ先見れば尊くなま候との玉ひ又信を得た
 らば同行にあらく物も申すまじきなり觸光柔輒の願あ
 り信なれば我になりて詞もあらく諍も必ぞ出來るも

のなりとの玉ふ果縛の穢躰有漏の報心貪瞋煩惱依然た
 る舊顔色にして農工商の營業をなすとよへどももらひ
 受たる名號内より薰じ照護し玉ふ光明外より觸るゝな
 りかくの如き法徳を蒙りあるものは自ら人道に乖き王
 法に戻るの所作なきに至る故らに思ふて尊とむ躰殊勝
 ふりとするには非ざれども尊とく殊勝に見ゆるなり所
 謂無表色とへこれこの謂なるべし如是の理由あるが故
 に單に眞諦門の安心起行を勸むるも如教奉行するもの
 は必ぞ品行正良にして政化し裨益あるべし是を眞俗二
 諦の妙旨とするあり

明治廿六年十一月廿六日印刷
全 十二月五日發行

定價金十五錢

京都市下京區花屋町通西洞院西入山川町四番戶

發行者

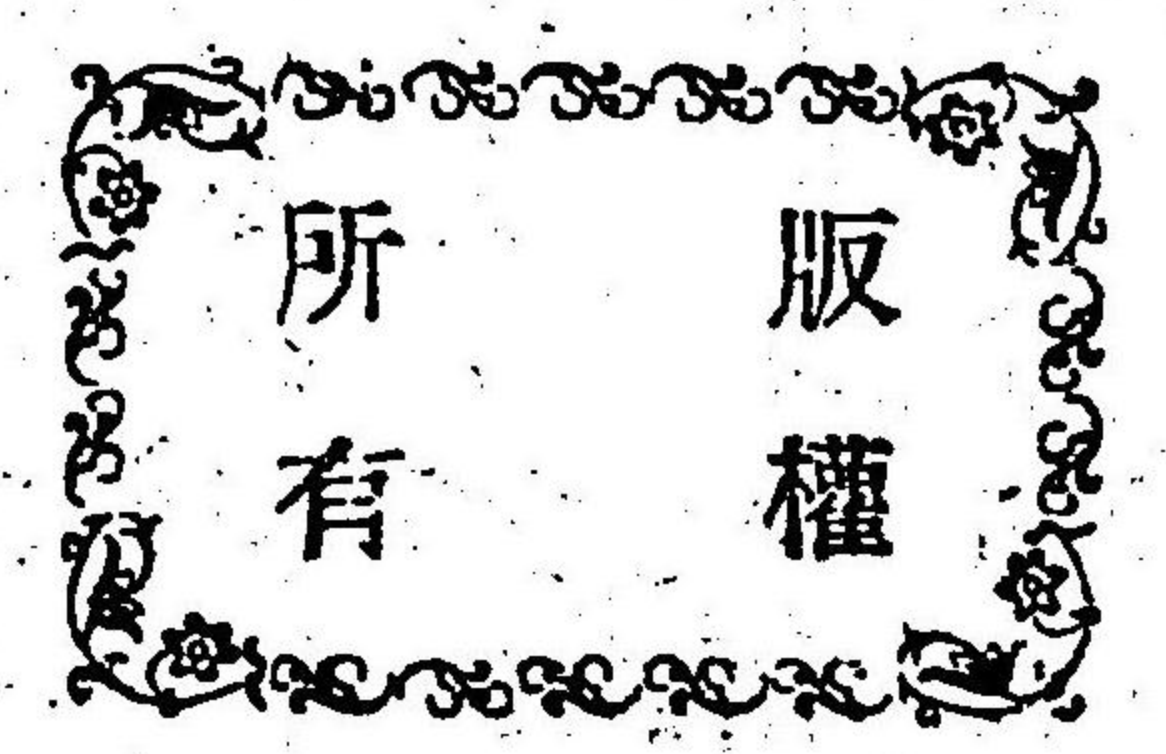
永田長左衛門

大分縣豐前國宇佐郡封戶村百七十二番地

著作 東陽圓月

大阪市西區阿波堀通二丁目六番屋敷

印刷者 山口恒七





1950

特 4 6

349

二 詁 妙 旨 談
後 篇

国立国会図書館